

# 保育者が一斉保育で選択する 主活動の実態に関する実証的研究

戸田 大樹

『教育学論集』第70号

(2018年3月)



## 保育者が一斉保育で選択する 主活動の実態に関する実証的研究

戸田 大樹

### 1. はじめに

本年、国は現代の教育的諸問題や保育ニーズなどを踏まえ保育者の保育実践の最低基準である幼稚園教育要領（文部科学省，2017）や保育所保育指針（厚生労働省，2017）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（文部科学省・厚生労働省・内閣府，2017）を同時に改定した。また、国は共働き家庭の増加に伴う保育者不足や保育者自身の質の低下も懸念している。保育者養成校（以下、養成校とする）においては、質の高い保育者を養成することが今後の大きな課題とされている。文部科学省はこの点を鑑み、保育者養成課程研究会に幼稚園教諭養成の質保障の観点から、モデルカリキュラムの開発を委ねた。その結果、保育者養成課程研究会（2017）は保育者養成校における学生の保育実践力の教授において核となる科目として「保育内容の指導法」を位置づけた。そして、保育内容の指導法の到達目標3には「指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる」、また、到達目標4には「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」（保育者養成課程研究会，2017）と記されている。ここには、養成校が学生に対して保育構想と模擬保育、その評価・改善の力量を育成する重要性が盛り込まれている。このように、養成校段階から学生に確かな実践力を育むことが喫緊の課題であることは自明のことである。本研究における実践力は実践知「学問的理論や知識の単なる適用ではない、個別具体的な状況で発揮され更新される実践者独自の暗黙の知識や思考様式、方略の総体」（砂上ら，2012）と定義する。

次に、保育者志望の学生を対象とした実習に関連する研究から、学生にはどのような実践上の課題があるのかを示す。まず、斉藤・大木（2008）は学生の保育実習に対する不安意識とその問題を検討した結果、対象児の理解や対象児との関わり方、実習生としての適切な態度・行動、対象児とのコミュニケーションの順に学生が不安意識を抱いていたことを明らかにしている。また、広瀬（2006）は学生が指導案にまとめるべき予想される幼児の活動に着目し、実習前の学生は子どもの姿を想起すること自体

に困難が伴うと述べている。これに対し、若山（2015）は部分実習指導計画作成の指導において、予想される子どもの姿と保育者の援助について、クラス全体と個別の子どもの動きを分け、具体的にどのような援助を行うのかを第三者が見ても分かるように明記するよう効果的な教示をしている。

ここでの後者の「個別の子どもの姿」に着目したのは大変新しい視点である。保育者として全体の視点も重要だが、まず目の前の子どもの具体的な姿を個別に想像することも重要である。この具体的な姿には、保育者のねらいが達成されている望ましいと捉えられる姿、またはその逆の姿で保育者の援助が必要と捉えられる姿（例えば、食べ残しをする子どももいるなど）を含め、学生の援助における反省的思考を育成することも重要である。なぜなら、ベテラン保育者であればあらゆる場面の子どもの姿を予想できるだろうが、保育者の卵である学生は同じようにいかないのが当然である。つまり、保育者がまとめる予想される子どもの姿の記述は、保育経験年数に支えられた省略版のまとめであると言い換えることができる。しかし、小川（2005）は学生の場合の予想される子どもの姿の記述に関して「予想される幼児の活動が子どもたちにやらせる行動のみとして書かれているので、結果から生まれることは、上手にやれた、あるいは上手にやれなかったことだけであって、子どもとの関係で自分の働きかけを反省することで自分の技を改善する手がかりもない」と指摘している。したがって、養成校は学生に対して記録方法を教授する場合は保育経験年数が少ないことを考慮する必要がある。さらに、松倉・上村・宮崎（2014）が学生の部分実習の平均実施回数は1.11回、全日実習の平均実施回数は0.54回であり、部分実習のみの実施は45.9%であるという実態を示すとともに、限られた日数で子どもの姿を捉え、それを自らが提案する「活動」に落とし込み予想することはかなり難易度が高いことを指摘している。これに加え、戸田（2015）は学生がまとめた実習簿の記述内容を分析した結果、学生は指導案の作成も実習課題としている中、保育実践中の乳幼児への言葉かけが課題として8割を占めていることを指摘している。このように、実習に関連する研究結果は養成校が「指導案の作成（予想される子どもの姿）」や「活動の選択」、「言葉かけ」などを含め、学生に対して確かな実践知を教授しきれていない現実を物語っている。

学生は実習中の子どもとの関わり方などの不安を抱える中、わずか1回の部分・責任実習に向けた活動の選択や指導案の作成に不安を抱えている傾向にある。責任実習における活動の決定に関して、松倉ら（2014）は保育雑誌に掲載されていた（32.4%）や責任実習を行うクラスの保育者に提案してもらった（24.3%）、テキストで紹介されていた（16.2%）、実習指導で指導案を立て、グループ体験した（13.5%）を要因として報告している。この数値から学生の「活動の選択」は養成校の教員からの直接的要因ではなく間接的要因が高いと考えられるが、コアカリキュラムの策定によって保育構想の機会が増加するため直接的要因へ移行するだろう。一方、ベテラン保育者で

あれば子ども理解や環境理解を基盤とし、ねらいに即した活動を選択して指導案を作成した上、子どもを見守ったり、適切な言葉かけをするなど、個々に適した援助が可能である。ところが、経験の浅い実習生の場合は子どもへの援助レパートリーも少ないため、援助方法を言葉かけに頼ろうとする。しかし、言葉かけレパートリーも少ないことから、子どもの状況に合った適切な言葉かけが困難であることが問題に成り得る(戸田, 2015)。さらに言えば、乳幼児への言葉かけ時に選択する「語彙」レパートリーも保持しているとは言い難い。保育実践においては、「指導案の作成(予想される子どもの姿)」と「活動の選択」、保育者の援助である「言葉かけ」「使用する語彙」は密接な関係性にあるため切り離して考えることはできない。しかし、浅川が「保育者は、行動の背景にそれぞれの理念や哲学を持っていながらも、その行動を理念や哲学と意識的にじっくり照らし合わせる時間はなく、即興的な思考活動を駆使して目の前の子ども達とともに明日の生活を作っている」と述べているように、ベテラン保育者は即興的に様々な子どもの姿に対応し得る実践知があるが、やはり学生にはまだまだ困難である。

以上、養成校の責務は学生が実習の過程において子ども一人ひとりを深く理解しながら適切な環境を構成し、遊びを中心とした総合的な指導を可能とするための実践知を教授することだが、これは決して容易なことではない。本研究では今後の養成校での保育・教育実習事前事後指導などに寄与するための基礎的資料を得ることを目的とし、保育経験年数を要因として保育者が一斉保育で選択する主活動の実態を実証的に明らかにする。具体的には、現職の保育者がどのようなねらいのもと主活動を選択して実践していたのか、また、そこで見られた子どもの姿の実際を明らかにする。この主活動に関する研究として、橋本(2009)は学生を対象とした指導計画立案を伴った部分・責任実習での主活動の内容について、実習報告書を材料としてジャンル別・年齢別に分類・分析した。その結果、よく行われた活動が絵本、フルーツバスケット、ペープサート、紙芝居、手遊び、封筒ロケットの順に多かったことを報告している。また、主活動の内容を5領域に分類しているが、学生が設定した保育のねらいは把握されていない。よって、現職保育者が実践した保育のねらいに基づいた主活動やそこで見られた子どもの姿の実際を明らかにすることは、養成校の言葉かけなどの指導改善に寄与するための基礎的資料を得るうえで大変意義深い。

なお、本研究では、保育経験が5年未満の保育者を保育者5年未満、また、保育経験が5年以上の保育者を保育者5年以上とする。ここで、保育者の保育経験を5年軸としたのは、保育者が中堅保育者(5年～10年)に成長することにより、幼児の行動を理解する際、一緒に遊びながら、幼児の意図を実現するための援助に気付いたりしているからである(高濱, 2001)。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象

保育者 51 名（男性 2 名、女性 49 名）

### (2) 調査期間

2018 年 1 月

### (3) 手続き

幼稚園や保育所に調査協力を依頼し、質問紙による調査を実施した。

### (4) 調査内容

フェイスシート：性別、年齢、住まい、所属、取得済の資格・免許の 5 項目である。

### (5) 質問紙

問は「あなたは実際に保育者になって、一斉保育の際にどのような「ねらい」と「活動」を選択して実践しましたか。また、実践中に見られた子どもの姿（望ましい姿や気になる子どもの姿）を最大 3 つ記入して下さい。」である。この問については、0 歳児から 5 歳児の場合実際に担当した年齢の乳幼児に対してのみ回答を求めた。

### (6) 倫理的配慮

本研究は、創価大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て行った。調査対象者には、研究の意義、目的、研究への参加は任意であること、匿名性の保持の方法について文書で説明し、同意書の提出をもって調査協力への同意とした。

## 3. 結果と考察

本研究では、保育経験年数を要因として保育者が一斉保育で選択する主活動の実態を実証的に明らかにする。具体的には、現職保育者がどのようなねらいのもと主活動を選択して実践していたのか、また、そこで見られた子どもの姿の実際を明らかにする。なお、本研究は特に 5 年以上の保育者の結果に焦点を当てていく。

### (1) 5 年以上保育者が乳幼児の主活動を選択した際のねらいと活動

調査の結果、保育者 5 年以上が 0 歳児から 5 歳児に対して主活動を選択した際のねらいが明らかになった。ここでは、0 歳児のみ示す（表 1）

表1 保育者5年以上が0歳児の主活動を選択した際のねらい一覧 (N21)

ねらい	活 動
子どもたちが快適に過ごし、新しい環境に慣れる。	スキンシップをする
一人ひとりの発達状況に合った全身運動が十分にできるようにする。	一人ひとりの発育・発達に応じた運動遊び
様々な食材に慣れ、食感を楽しみながら咀嚼しやくする力をつける。	手掴み食べや食具を使って食べる
絵本を楽しむ。	読み聞かせ
音楽に合わせて楽しむ。	リトミック
保育者とのふれあい遊びを通して全身運動を楽しむ。	歌にあわせて身体を揺らす
絵本の世界や言葉の繰り返し、リズムを楽しむ。	読み聞かせ「がたんごとんがたんごとん」
繰り返しの言葉を楽しむ。	読み聞かせ「だるまさんが」
楽しんで絵本を見る。	読み聞かせ「いないいないばあ」
季節の移り変わりを感じる。	散歩に行き自然に触れる
絵本を見て楽しむ。	読み聞かせ「いないいないばあ」
ハンカチ遊びをする。	読み聞かせ「いないいないばあ」 「おかおのかくれんぼ」
自然に触れ、保育者の言葉かけを通して言葉を育んでいく。	散歩
友達と共感しあいながら自然に触れ季節を感じる。	散歩
心地よく過ごせる環境をつくる。	・眠る ・食べる
「あった」「みつけた」が伝わるよこび。	ポットンおとし、いないいないばあ
自然を楽しむ。	散歩
体を動かすことを楽しみ、心と体の発達を促す。	ビデオを見ながら保育士と一っしょに体操をする
保育者との楽しいやりとりを通して発語への意欲をもつ。	読みきかせ「いないいないばあ」
スキンシップを楽しむ。	ベビーマッサージ 「ふれあいリラックス体操」 「ブラッシング体操」
甘えや喜びなど自己表現を受け止めてもらい豊かな感情をはぐくむ。	歌「だっこして、ぎゅっとして」

## (2) 保育者5年以上が乳幼児に選択した主活動

保育者5年以上及び保育者5年未満が乳幼児に選択した主活動については表2・3の通りである。保育者は乳幼児に対して「遊び（運動・音楽・造形含む）」「基本的な生活習慣（食・眠等）」「散歩」「行事」「その他」に関する主活動を選択していることが明らかになった。

分析の結果、保育者5年以上及び保育者5年未満が乳幼児に選択した主活動は、一

人複数カウントによって総件数 224 件であった。「遊び（運動・音楽・造形含む）」件数は 176 件（保育者 5 年未満 33 件、保育者 5 年以上 143 件）、「基本的生活習慣（食・眠等）」件数は 18 件（保育者 5 年未満 1 件、保育者 5 年以上 17 件）「散歩」件数は 13 件（保育者 5 年未満 3 件、保育者 5 年以上 10 件）、「行事」件数は 14 件（保育者 5 年未満 2 件、保育者 5 年以上 12 件）、「その他」件数は 3 件（保育者 5 年未満 0 件、保育者 5 年以上 3 件）であった。分析については、主活動の記述を保育者 5 年未満と保育者 5 年以上に分けて経験年数の差からカテゴリー分析をした。データの客観性を確保するため、カテゴリー分析は 2 名の評定者が独立に実施した。終了後、2 名の分類結果を照らし合わせ、データの不一致が起きた場合は協議の下で最終のカテゴリーを決定した。分析の際、まとめられた記述の中に指定された問いに対して正しく回答していないと判断された記述は事前に削除した。

本結果から、やはり、幼児教育・保育は遊びを中心とした指導によって乳幼児の心身の健全な発達を促すため、保育者が主活動を遊びにするのは当然のことである。そこで、保育者が乳幼児に対して選択している主活動「遊び（運動・音楽・造形含む）」の実態を明らかにすることとした。分析については、保育者 5 年以上が選択した主活動「遊び（運動・音楽・造形含む）」の記述を主な対象とした。データの客観性を確保するため、上記と同様にカテゴリー分析は 2 名の評定者が独立に実施した。終了後、2 名の分類結果を照らし合わせ、データの不一致が起きた場合は協議の下で最終のカテゴリーを決定した。

分析の結果、保育者 5 年以上が乳幼児に選択した主活動「遊び（運動・音楽・造形含む）」の上位 10 は、「読み聞かせ」「製作」「運動・体操」「紙を使った遊び（折り紙など）」「ままごと」「紐通し」「お絵かき・塗り絵」「手遊び」「しっぽとり」「ごっこ遊び」「リトミック」「泥・砂遊び」であった（表 4）。

表 2 保育者 5 年以上が乳幼児に選択した主活動 (N39)

経験年数	対象年齢	主活動(件数)				
		遊び(運動・音楽・造形含む)	基本的生活習慣(食・眠等)	散歩	行事	その他
5年以上	0歳児	15	3	4	0	1
	1歳児	22	2	2	0	0
	2歳児	22	2	3	1	1
	3歳児	39	2	0	1	0
	4歳児	22	4	1	1	0
	5歳児	23	4	0	9	1
合計		143(77.3)	17(9.2)	10(5.4)	12(6.5)	3(1.6)

表 3 保育者 5 年未満が乳幼児に選択した主活動 (N11)

経験年数	対象年齢	主活動(件数)				
		遊び(運動・音楽・造形含む)	基本的生活習慣(食・眠等)	散歩	行事	その他
5年未満	0歳児	2	0	1	0	0
	1歳児	5	0	0	0	0
	2歳児	5	0	0	0	0
	3歳児	11	1	1	1	0
	4歳児	6	0	0	1	0
	5歳児	4	0	1	0	0
合計		33(84.6)	1(2.6)	3(7.7)	2(5.1)	0(0)

表4 保育者が選択した主活動 (N39)

活動名	件数(%)
読み聞かせ	33(23.1)
製作	13(9.1)
運動・体操	9(6.3)
紙を使った遊び(折り紙など)	8(5.6)
ままごと	6(4.2)
紐通し	6(4.2)
お絵かき・塗り絵	6(4.2)
手遊び	6(4.2)
しっぽとり	4(2.8)
ごっこ遊び	4(2.8)
リトミック	4(2.8)
泥・砂遊び	4(2.8)

(3) 主活動時の子どもの望ましい姿及び保育者の援助が必要な姿

調査の結果、保育者5年以上が0歳児から5歳児に対して主活動を選択した際の子どもの望ましい姿及び保育者の援助が必要な姿が明らかになったが、ここでは、0歳児のみ示す(表5)

表5 主活動時の0歳児の望ましい姿及び保育者の援助が必要な姿 (N21)

子どもの姿
特定の保育者と関わる中で、安心感と信頼関係を築く。
朽枝台や階段での登り降りを楽しむ。
食材を手で触る。口へ運ぶ。
同じ言葉の繰り返しを読むと、身体を動かしたりする。
先生が楽しむ姿を見て、一緒にやろうとする。
・歌にあわせて、マラカスやタンバリンなど音の出るおもちゃをたたいたり、身体を揺らしたりして楽しむ。
・保育者と触れ合うことで声を出して笑ったり、関わることを楽しむ。
・「がた、ごと」といいながら身体を自然に動かす子もいる。
・読み終わると「もっと」と繰り返し読むことをせがむ子も多い。
・おやつ準備の間手洗いを済ませた子はすに座って静かに見る。
・だるまさんがという言葉のリズミカルに読んでもらおうと喜んでみている。
・いろいろな動物が出てくると「ワンワン、ニャーニャー」と泣きまねをする。
・お話しと一緒にないないないばあをやる。
・次のページが待ちきれず、絵本をめくろうとしてよってくる。
落ち葉を拾う。吹きだつた枯葉を踏んで音に喜ぶ。カラスウリを食べられると思って欲しがる。
・保育者の周りに座っている子、「あー」と声を出す子、ニコニコと手をたたきながら見られる。
・他に興味を持ち絵本を見ない子もいる。
保育者の「ないないないばあ」の声に合わせて「ばあ」と声を出し、ハンカチを顔から外し楽しむ姿が見られる。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・戸外に出るとうれしそうに声を出したりクックという子もいる。</li> <li>・絵本を見ながらこんにちはの言葉に合わせてお辞儀をする姿が見られる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ち葉を拾い集める。</li> <li>・大人が間に入り友達同士落ち葉を手に取り笑いあう。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・歩きたくないと泣き出す子。</li> <li>・みんながいるところに関心を持たず一人だけ先に歩いてしまう。</li> </ul>
<p>生活の中で「眠る」「食べる」ことが規則正しく十分に保障されると、気持ちが安定し、探索活動への意欲にもつながる。一人ひとりのリズムも育ちも個人差が大きいので留意する。</p>
<p>[自分⇄人⇄対象]の3者関係が成立し、穴おとしであそんでいて、手からポットンと箱の中におちると「ウウウッ！」などと声を出して大人の反応をみる。</p>
<p>外の空気に触れて楽しむ。</p>
<p>初めは保育士の動きに身をまかせている様子だが、少しずつ顔の表情も変わり、楽しさを感じている子もいる。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・優しい語りかけの中で、言葉をかけられる心地良さを味わっている。</li> <li>・喃語や片言を受け止めたり返したりしてもらいながら、発したり、模倣しようとする。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ち良い、心地よいことがわかり、愛着関係が深まる。</li> <li>・優しくふれられたり、話しかけられることで安定する。</li> </ul>
<p>歌にあわせて、保育者とのコミュニケーションを楽しんでいる。</p>

#### (4) 考察

本研究では今後の養成校での保育・教育実習事前事後指導などに寄与するための基礎的資料を得ることを目的とし、保育経験年数に着目して保育者が一斉保育で選択する主活動の実態を実証的に明らかにした。

その結果、保育者5年以上も保育者5年未満も一斉保育で選択した主活動は「遊び（運動・音楽・造形含む）」が多い。しかし、保育者は遊びの視点だけではなく乳幼児の基本的な生活習慣の確立や行事に対する変化や潤いなどのねらいを抱き、また、子どもの発達段階や個性等も踏まえて総合的な視野からねらいをたて、それに即した活動を選択している。先にも述べたが幼児教育・保育は保育者の遊びを中心とした指導によって乳幼児の心身の健全な発達を促すため、保育者が主活動「遊び（運動・音楽・造形含む）」を選択すると考えられる。ここでの遊びの上位10は「読み聞かせ」「製作」「運動・体操」「紙を使った遊び（折り紙など）」「ままごと」「紐通し」「お絵かき・塗り絵」「手遊び」「しっぽとり」「ごっこ遊び」「リトミック」「泥・砂遊び」であったが、橋本（2009）の調査ではよく行われた活動とされる絵本、フルーツバスケット、ペープサート、紙芝居、手遊び、封筒ロケットと重複している活動もある。この主活動の内容の差異は、実習経験を積んだ学生と保育者5年以上による保育の経験年数の差も一つの要因であると推測される。

また、橋本（2009）は主活動の内容を5領域に分類していたが、学生が設定した保育のねらいは把握されていない。本研究ではねらいを5領域には分類していないが、現職保育者にねらいを記述してもらったことでねらいと活動のつながりが明確化されている。このように、現職保育者が実際に実践した保育のねらいに基づいた主活動や

そこで見られた子どもの姿の実際を明らかにすることは、今後の養成校における指導案作成などの指導改善に寄与するための基礎的資料を得るうえで大変意義深い。特に表5に示したように、保育者5年以上は主活動時の子どもの望ましい姿に加え、保育者の援助が必要な姿も示している。したがって、養成校が学生に指導案の作成を教授する場合、「援助が必要な子どもの姿」も踏まえて援助を考えられるよう、この点も含めて段階的指導案作成の実施を提案したい。なぜなら、保育経験の浅い学生は5年以上の保育経験のある保育者と同様に子どもの姿をイメージすることは困難だからである。経験の浅い保育者であっても、日々の保育実践を振り返る中で何度も子どもの姿をイメージし、個々や集団に応じた援助を悩みながら考える。この繰り返しによって、経験の浅い保育者も子どもの姿を具体的にイメージ可能となったベテラン保育者が作成する要点を押さえた指導案の作成が可能になるのだろう。

以上、保育者が子どもの日々の姿を捉えてねらいを紡ぎ、子ども達に適切な活動を選択して保育を展開する場合、その活動の差異によって子ども達の姿にも差異がもたらされると筆者は考える。子ども達の姿に差異がもたらされるということは、保育者はその姿に様々な援助が求められることを意味する。そこで、今後は保育者が主活動を展開する際、様々な姿を見せる乳幼児に対して保育者がどのような言葉かけや語彙を使用しているのかを明らかにしたい。

## 謝辞

本論文の作成に当たり、調査に協力いただいた幼稚園と保育所の園長先生をはじめ、保育者の方々に深く感謝いたします。

## 引用・参考文献

- 小川博久 (2005) 「保育者にとって「カリキュラム」を作ることはどういうことか」  
『幼年教育研究年報』, 27, 38-51.
- 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館, 2017.
- 斉藤葉子・大木みどり (2008) 「実習の事前・事後指導に関する研究 (V) - 保育実習における2年次学生の不安意識とその問題について -」『羽陽学園短期大学紀要』, 28, 21-40.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 2012 「幼稚園の片付けにおける実践知 - 戸外と室内の片付け場面に対する語りの比較 -」『発達心理学研究』, 23(3), 252-263.
- 高濱裕子 (2001) 『保育者としての成長プロセス』, 風間書房.
- 戸田大樹 (2015) 「保育科学生の実習における課題に関する研究 - 言葉かけの問題を中心として -」『茶屋四郎次郎記念学会誌』, (5), 125-134.

- 橋本淳一（2009）「指導計画立案を伴った部分・責任実習での主活動の内容－保育実習 2 報告書の記述からの検討」『山村学園短期大学』, 21, 26-37.
- 広瀬健一郎（2006）「大学における保育短期指導計画作成の教授法 活動提案型指導案の立案指導（小特集 保育者養成実践研究）」『文化女子大学室蘭短期大学研究紀要』, 29, 23-45.
- 保育者養成課程研究会（2017）「平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」, < [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1385790.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm) > 2017 年 1 月 5 日アクセス.
- 松倉佳子・上村麻郁・宮崎静香（2014）「保育実習における責任実習の現状と課題（1）本学の学生の責任実習に関するアンケート調査から」『清和大学短期大学部紀要』, (43), 33-42.
- 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館, 2017.
- 文部科学省・厚生労働省・内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館, 2017.
- 若山育代（2015）「大学生の部分指導計画作成におけるエラーの原因：一斉保育の部分指導計画を取り上げて」『保育士養成研究』, (33), 21-30.

## **Empirical Study of Main Activities Selected by Childcare Professionals in Structured Activities**

**Daiki TODA**

The purpose of this study was to discover the main activities and actual observed responses of children based on the childcare goals implemented by current childcare professionals and to obtain basic resources that can contribute to better guidance in training schools such as the manner of talking to young children. Results of written questionnaires revealed that current childcare professionals establish goals that suit the development of the children, choose various main activities, and then conduct them. Moreover, during this process both aspects can be seen such as whether the children are behaving in the desired manner or whether assistance from the caregiver is needed.